

小さな会場が無限に広がる

カンパニーTsurukam
「Qui-KOTO」

天理日仏文化協会のベルタン・ポワレは行き慣れた会場なのに、使い方が違うだけで見知らぬ空間になっていた。階段に腰を下ろして開場を待っていたら、いつもとは別の正面のドアが開いて、一本の細い道の向こうにまるで天からの使いのような女性が歌いながら近づいていた。青白い光に誘われて彼女の後を追ひ、立ち止まったところで横を見れば、紗幕の向こうでふわふわと踊っている人の姿が見える。天女に導かれて中に入り、しばらく鈴木香里のダンスを見ていると、彼らはするりと紗幕の向こうに消え、まるで彫刻のようにポーズをとる。先ほど観客が入場した通路が神棚のような神聖な場所に変わっている。観客の合間を縫って踊ったり、隅の方で影絵が現れたり、いつも客席となっていたところで人形劇が行われたりと、ステージはどんどん移動していくから、ひとつの狭い空間なのに広く感じる。それには大変に感心したのだが、場所によってはシーンが見えないことがあるのが気になった。一箇所に座らずに見えるところに自由に移動してくださいとは言われていたけれど、自由に移動する雰囲気ではなかったし、テープで会場を仕切られたシーンでは動けず。見えるものだけ見れば良いというけれど、見たいのに見えないというのはストレスがたまる。観客の誘導方法に工夫があればよかったのではないかしら。面白い企画だっただけに残念。なお、ラストの日原史絵の歌と演奏は圧巻だった。(10月7日 Espace Culturel Bertin Poirée)



©Jean-Michel Jarillot